

## 小泉文夫記念資料室：新たな音楽学研究の拠点を目指して

小柴 はるみ

今回、東京藝術大学小泉文夫記念資料室（以下、小泉資料室）が特別賞を受賞したことは、大変喜ばしい。この資料室は一人の音楽研究者のトータルな調査・研究資料が、アーカイヴとしてまとまって整理されている、日本でも稀な場所であると思う。

1983年8月に小泉文夫教授が56歳で急逝され、どうすればその資料の分散を防ぎ、その思考の軌跡を残せるか、多くの関係者がその行く末を案じたが、小泉三枝子夫人は東京藝術大学音楽学部への一括寄贈を決められた。あれから40年近くがたった今、資料が管理され学内外の利用に公開されている現状を目にして、それが正しい選択であったと感じるのは筆者だけではあるまい。小泉資料室の歩みには紆余曲折もあったと聞くが、歴代の室長である柘植元一教授、植村幸生教授をはじめ、資料室の仕事を担ってきた人々のこれまでの尽力には計り知れないものがある。

故小泉文夫教授の研究の出発点は、1950年代後半に始まる日本伝統音楽の研究（音階論そしてリズム論）であった。（楽器論や音律論も予定されていたが…。）そして日本音楽を良く知るためにとの考えから、1957年のインド留学以降、その研究対象はアジアから世界諸民族の音楽へと急速に広がった。アジア、中東、東欧、南北アメリカ、アフリカ、オセアニア等を駆けめぐり、録音と聞き取り調査を集中的に行った。そこには国際交流基金プロジェクト「アジア伝統芸能の交流」や民主音楽協会「シルクロード・コンサート」などの企画や監修者としての調査も含まれる。こうして世界各地で蓄えた情報やアイディアは、放送番組やレコード、出版物などの形で世に問われ、そのわかりやすい語り口や文章で、多くの音楽愛好者を世界音楽の魅力にめざめさせたのである。

1983年の寄贈当時、こうした多種多様な仕事の資料が段ボール箱に詰め込まれ、梱包されて整理を待っていた。それらを仕分けし、最低限の整理を終えるまでに3年以上かかったと記憶する。その大半は1950年代から約30年にわたり氏が携わった多彩な仕事にかかわるものである。2020年現在、小泉資料室所蔵資料は次のものからなっている。

- 諸民族の楽器（約750点）
- 録音テープ（2,322点）
- 写真（スライド約16,000点、スチール21,000点以上）；主に調査時のもの
- フィールドノート、手書き原稿、メモ等（3,000ファイル以上）：出演台本を含む
- 映像資料（54点）：出演番組の放映時のものなど

- 書籍（図書約 5,200 冊、雑誌約 480 種、楽譜 940 冊）
- レコード（約 3,400 点）
- 民族衣装等（58 点）

また、参考資料の「小泉文夫記念資料室の歩み」（小泉資料室作成）を見ればわかる通り、資料室では整理と公開に向けて様々な努力がなされてきた。そこでは資金確保のための研究と、その成果公開（数度にわたる楽器展、刊行物、情報の web 公開など）が絶えず行われてきている。

ところで、小泉教授は「音楽の存在について（享受者の）体験の中にその実態を把握するべきである」との考えから、常に音楽の現場に身を置き、生の音に触れてこられた。音楽が生み出される場に立ち会ったかけがえのない記録として、録音は他の媒体にもまして氏の重要な研究資料であり、言い換えれば全ての資料は録音を軸につながっているとも言えよう。

そして資料整理の中でも、膨大な録音テープの処理には当然かなりの時間がかかった。機材も資金も限られるなか、第一次デジタル化を終えたのは作業開始から 10 年後であり、さらにテープの内容聴取は難題で、録音地域の言語や音楽を理解する者でなければ内容を確定できない。それでも、各地域の音楽を専攻する門下生や、東京藝術大学の修士・博士の学生らの協力を得て、氏の主要な調査地については、録音テープのデータベース公開にまでこぎつけた。聴取を担当した学生の中には、現在その領域の専門家として活躍する者も少なくないという。このほかにも小泉資料室の活動について触れるべき内容は多々あるが、ひとまずここで筆を置く。

小泉教授は人とのふれあいを大切にし、音楽による人々の交流を心から望まれる方であった。また音楽する事や音楽そのものについて、いつも柔軟に思索を巡らせた。ここにある諸資料には氏の発想の種が数多く潜んでいるはずである。その種を新しい世代が掘り起こせば、さまざまな思索の花を咲かせる日も訪れよう。その日のためにも、小泉資料室が小泉文夫という研究者について情報を発信し、時代に即した形で資料を公開し続けることを望んでいる。

（東海大学名誉教授）